

氏 名 高木 仁

学位(専攻分野) 博士(文学)

学位記番号 総研大甲第 1891 号

学位授与の日付 平成29年3月24日

学位授与の要件 文化科学研究科 地域文化学専攻
学位規則第6条第1項該当

学位論文題目 自然資源の利用に関する環境人類学的研究
—ニカラグアの先住民による商業的ウミガメ漁の事例—

論文審査委員 主 査 教授 野林 厚志
教授 池谷 和信
准教授 南 真木人
教授 池田 光穂 大阪大学
名誉教授 秋道 智彌
総合地球環境学研究所

論文の要旨

Summary (Abstract) of doctoral thesis contents

論文題目：自然資源の利用に関する環境人類学的研究

－ニカラグアの先住民による商業的ウミガメ漁の事例－

本稿は、ニカラグアの先住民によるウミガメ漁の捕獲と利用についての環境人類学的研究である。第1章では、ウミガメを含む海洋資源の利用に関する研究動向を展望し、研究の目的、方法、研究枠組みを記述した。これまでの自然資源利用に関する環境人類学研究ではクジラやマグロなどの稀少な回遊型の海洋資源の持続的な利用と管理をめぐって多くの事例が蓄積されてきた。世界的にみても現在、ウミガメは稀少動物として保護されていることが多く、アオウミガメ漁による資源利用の実際の分析についての研究はほとんどみられない。本稿では、特に先住民によるアオウミガメ漁での資源利用の実践と環境認知、および食肉の販売や流通の実態、約半世紀でのウミガメの商業的な利用の変化を解明して、商業生産と自給的消費とのかかわり方を把握することを目的とした。研究方法は、漁への直接参与（5度の航海、のべ40日間）を中心としたのべ16ヵ月にわたる現地滞在で入手した基礎資料の分析である。研究枠組みとしては、文化生態学、政治生態学、歴史生態学を統合する枠組みを用いた。本研究は、アメリカの地理学者のニーチマンが1970年代に調査した東ニカラグアのミスキート・インディアンを対象にしている。

第2章では、ウミガメ漁による資源利用の実践と環境認知についての研究結果を示した。特に調査村落での漁の物質文化（漁具や漁船）に関する調査結果や、海での漁撈実践・航海・漁場の空間認識・海中のアオウミガメの動きに関する考え方や漁獲量についての調査結果を用いた。漁師たちは海中のアオウミガメを大きな群れで行動し、その群れは雌が中心のハーレムであたかも村の放牧牛のように群れをなすとみなす。漁師たちは最適な漁場を探しながら日中に仕掛ける網で夜の寝床岩でカメを狙う。大きなあたりの時は一日で10頭（うち9頭が雌）もの捕獲があった。漁は長い時で一週間にも及ぶため、このアオウミガメの寝床となる岩をいかに迅速に探索することが求められ、その岩場間や漁場間の移動をいかに円滑に移動し、追跡するかが漁の成否を分けた。寝床とする珊瑚礁の岩場（Walpaya）もさまざまな形があり、漁師たちはそれらを大きな岩、小さな岩、一つ一つの岩、3つの岩などという形状名称で表現して識別した。

第3章では、アオウミガメ肉の販売・流通の実態についての研究結果を示した。現地調査の結果、村の漁師たちは捕獲の7割を港町へと運び、そこで現金を得る。漁師たちは売上金を均等に6等分し、そのうち網元として船主だけが2をとり、その他の漁師たちは1をとるというやり方であった。漁師たちの村でもウミガメ肉の商売によってもたらされる現金は重要で、それを村で巧みに転売すれば一週間の食費を浮かせるほどの利益を算出することも可能であった。肉（Wina）の交換は同じ母親の血筋を持つA・B・Cの交換例を調査したところ、半月での計6回の販売事例があり、そこでの交換量は金額に換算すれば360C\$（60C\$×6回、一週間分の食費に相当、1\$=25C\$）が浮くことほど大きなものであった。

第4章では、約50年間の村の資源利用の変遷についての研究結果を示した。50年前の村のアオウミガメ漁撈は、村の熟練漁師たちによって小規模に展開していたが、当時すでにケイマン諸島民が南下してきており、彼らの捕獲を手伝うなどした。その後、70年代前後にはケイマン諸島の南進の禁止（66年）、米開発資本による缶詰工場の設立と閉鎖（67-77

(別紙様式 2)
(Separate Form 2)

年)、ロブスターの潜水漁の急激な成長、ニカラグアのワシントン条約の批准(77年)が次々と起き、その後の内戦と自治州設立を経るなかで現代のような村のアオウミガメ漁は形成され、この地域の生産―流通を中心的に担うまでになったことがわかった。

第5章の討論では、先住民によるアオウミガメ資源の商業的な資源利用の持続可能性を検討している。第2~4章では現代のアオウミガメ漁の文化生態学、政治生態学、歴史生態学の側面に焦点を当て、その変容や都市との関わりをふくめた実際の漁の実践や商業性について分析してきた。その結果、歴史的にみると現代のアオウミガメ漁は、小規模だったものが半世紀前のケイマン諸島民の南下の影響を受けて、その後の潜水漁が急成長や国際取引が禁止されるなかで、地域内での商業として発展を遂げている。

以上のことから、現代の持続可能なアオウミガメ漁による資源利用を考える際に、旧来の「先住民による自給的漁撈」という形式的な位置づけは適用できず、こうしたウミガメ漁をめぐる歴史的な変遷や、商業的な海産資源利用の実際をふまえた共有地利用のための戦略を考慮しなければならないことが明らかになった。

(別紙様式 3)
(Separate Form 3)

博士論文審査結果の要旨
Summary of the results of the doctoral thesis screening

論文題目：自然資源の利用に関する環境人類学的研究

－ニカラグアの先住民による商業的ウミガメ漁の事例－

本論文は、ニカラグアの先住民族であるミスキートが行っている商業的なアオウミガメ（以下ウミガメ）漁を対象とした環境人類学的研究である。

出願者は、2009年から2016年にかけて断続的に16ヶ月間、現地に滞在し、船上における参与観察も含め、ミスキートの商業的ウミガメ漁に関する環境人類学的フィールド調査を行った。出漁から捕獲までの海洋環境における人間の行動、ウミガメの棲息地域の海洋地勢やウミガメの生態・行動に関する漁民の知識や航海術、ウミガメの解体から肉やその他の部位の販売、流通、分配も含めた消費までの過程を丁寧に観察し、得られたデータを精緻で堅実な民族誌的記述により明確に示した。その上で、文化、政治、歴史の3つの側面から回遊性海洋資源の持続的な利用の可能性について論じている。

論文は、序論にあたる第1章、現地調査の民族誌的記述である第2章から第4章、考察および結論部にあたる節を含めた第5章から構成されている。

第1章では、海洋資源の利用に関する近年の研究動向を概観し、文化、政治、歴史の3つの側面が人間と生態環境との関わりを分析する上で重要であることを指摘し、本研究でとる方法論を理論的に裏づけた。

第2章では、ウミガメ漁の実践とそれを支えるミスキートの民俗知識についてのフィールド調査の結果とその分析、考察が民族誌的記述を通して示されている。可視化されにくい海棲動物の行動や海洋地勢の理解を、ミスキートは陸棲動物や陸上地形との比喻を通して実現し、それが漁獲量にも反映されていくことが定量的に論じられている。

第3章では、捕獲されたウミガメの販売、流通、消費にいたる一連の過程が詳細に記述されている。資源調達、すなわちウミガメの捕獲は男性が行うものの、商業的流通の場面で女性が果たす役割は大きく、商いという社会的、経済的行為を通して女性が生態資源を操作することが、母系社会であるミスキートのウミガメ利用の特徴となっていることが示されている。

第4章では、調査の対象となった集落における海洋生態資源の利用が、外部者との交渉、国際政治の影響、地域社会の政治状況のなかで変化してきたことが論じられている。現代のウミガメ漁は数十年という比較的、短い期間で確立した生業であることを検証した。これは、先住民族の生業に対して抱かれがちな伝統性や先住性、自給的性格への批判的検討を促すとともに、その新旧とにかかわらず、先住民族の生業活動が豊かな民俗知識と生業実践を育むことを論証として得ている。

第5章では、第2章から第4章までで示した結果について、文化、政治、歴史という3つの視点で統括的に考察を行い、地域内で行われる商業的なウミガメ漁が持続可能な生態資源の利用として成立しうるモデルの提示を試みた。

ウミガメのような回遊性動物を対象とした生態学的資源利用では、回遊空間の権利主体

(別紙様式 3)

(Separate Form 3)

間での個体の移動に準じた共有、回遊空間の配置を超えた国際的・地域的取り決めにもとづく共同管理、が先行モデルとして知られている。出願者は、ウミガメが希少資源として、利用についての国際的な取り決めが策定しにくくなっていること、回遊性という性質ゆえにそれぞれの地域での不均一な利用形態が資源保全に悪影響を与えやすいこと等を考慮し、地域や民族ごとの資源利用の実態が反映された応分的な資源共有が望ましいあり方となることを結論として引き出した。

一方で、国の決めたウミガメ捕獲の総量規制とミスキートの漁労実践との確執、グローバルな視点からのウミガメ漁規制やニカラグアならびに周辺国の資源管理の取組がミスキートのウミガメ漁に与える影響については必ずしも十分な議論が行われているとは言えない。3つの柱のうち、特に政治的観点からの分析についてはさらなる議論の深化が必要と思われる。

上述のような課題は残されているものの、本研究は、ウミガメの個体群を対象とした先住民族の商業捕獲に関する本格的な研究の嚆矢をなすものであり、本研究で得られた知見、提示された資源管理のモデルは、今後、益々重要性を増すことが予想される回遊性海洋資源の利用に関する議論に大きな貢献を果たすことは間違いない。審査委員会は全員一致で、本論文が博士の学位を授与するに値するものと判断した。